

幼児教育科への感謝と想い

～5年間の指導を終えるにあたって～

井原 忠郷

はじめに

比治山大学短期大学部幼児教育科の教授に就任して、早くも5年が経過しようとしています。

この間に多くの学び、多くの出会い、多くの感動を経験することが出来、心より感謝いたしております。

今から7年前に、前学長の高橋 超先生から比治山大学短期大学部での教鞭を依頼されて、とてもではないが私の力でお応えすることは無理だということで、そのご依頼をお断りさせていただいたのですが、「それでは非常勤講師で！」ということで、2年間、非常勤講師をさせて頂きました。その間にも前期、後期の区切りには何度もご依頼をいただきながら、逃げ回っていましたが、ある日学長が「井原先生、あなたは32年も保育を経験され、幼い子どもたちから沢山の宝物をもらわれたのでしょうか？あなたは、その宝物を自分の物だけにして、死んでしまうのですか？これから保育者として幼子たちの為に頑張ろうとしている若い学生たちに、あなたがもらった宝物を伝える責任と義務はありませんか？」との殺し文句に、はたしてご期待に添えるかどうか？不安のまま教師として就任することをお受けしたのです。

非常勤講師としては、いくつかの大学や短大、専門学校で講義の経験はあるとはいえ、常勤のしかもいきなりの教授という肩書は正直なところ戸惑いあるのみでした。2年間は講義ノートの作成に追われる日々でした。それまでは、3～5歳の幼児相手の毎日でしたから、本当に学生が怖いと思うことばかりでした。3年目になってやっと教室へ行き学生たちと語り合うこと

が楽しくなってきたように思います。

こうした大学人としての生活の中で、私なりにいくつかの課題を意識して来ました。幼児教育科を辞する時に、そのことについて、少し述べさせていだきと思います。

1. 授業で感じたこと

現在の文部科学省が提示している教員免許法での授業時間では、実際には保育現場ですぐに役に立つ、仕事が出来る人材を育てることは、ほぼ不可能であるということです。勿論、大学で即戦力のある人材を育てることを考えてはいないと思うのです。しかし、少しでも保育現場で頑張れるだけの力をつけて送り出したいと考えるのは養成校の先生の誰もがお考えのことではないかと思います。1教科が15コマ(90分)ですが、特に保育現場に直結した「実技」「実務」に関しても指導内容は、基礎理論の指導をどれだけ十分にしてもらっていても、なかなか実務レベルで使いこなせる、理論を実践に結びつけることは不可能に近いものがあると思うのです。

比治山大学短期大学部幼児教育科の先生方は、それぞれ専門分野でのエキスパートであり、学生たちも一生懸命に学んでいるのですが、そのことと、保育現場で保育実践のつながりまで、結ぶまでの力にはなっていないということです。もったいないような気がしてなりません。基礎部分をせっかく指導してもらっていても、それを実務面で利用し、使えるだけの具体的な方法を知らないということでしょう。

私は就任の時点で学長から「保育現場に出る

学生たちに現場で頑張れる実践面を中心とした講義をしてもらいたい！」と言われましたが、私の担当した教科「保育内容（言葉）」「教育方法論」「保育カンファレンス」のテキストの多くは、保育現場からはかなりの距離を感じました。従って、前任者のシラバスの内容を生かすことを前提として、シラバスに合った講義内容を自分で作成し、アレンジすることにして、教材は基本的には私が保育現場で実際に作成し使ったものをプリントにして毎回配布することにしました。このことは間違っていなかったと、自信を持っています。というのは、卒業して行った学生の多くが「先生のプリントがみんな役に立っています！」「子どもの歌のプリントと資料は机の上の本箱に入れて、いつも参考にしています！」と話してくれるのです。理論武装は学者の先生方が最高の講義をなさって下さる比治山大学短期大学部幼児教育科です。その土台の上に立派な保育者という建物を作り上げるのは保育現場の経験を生かした「実践面を中心とした、具体的な講義」が必要であると確信しております。

特に私は、「マイ資料」の作成については、かなり詳しく、資料の提供と講義とをからませて指導してきたつもりです。これからの幼児教育界は他人の資料をそのまま利用していたのでは、生き残ることは不可能だと確信しております。いつまでも保育者として頑張れる人材を育てていく必要があると思っています。

例えば、「初めてハサミを使わせるときの指導方法」とか、「お弁当を初めて食べる時の指導の在り方（集団での指導方法）」については大変重要な課題でありながら、このことについての具体的な指導方法を説明した資料はありません。保育現場に出て初めて「どうしたらいいのか？」と戸惑う新人の教師はどこにでも見られるのですが、養成校も保育現場も新人教師に任せたまと言るのが現実です。

「言葉の習得」についても、発達過程については、かなり細かく書いた教科書はありますが、「言葉にならない言葉から、喃語（なんご）に、喃語から言葉になる過程については、文字では

なく具体的な状況（場面）を言葉で、あるいは映像を使うような方法で目と耳から理解させる必要があると思うのです。理論面で習得の過程を知ると共に、実際の姿を見ることができることによって、理解を早め深く知ることができると思うのです。

教育課程や指導案（月案・週案・日案）になると、できるだけ今、保育現場で使われているものを提示して、今の子どもに必要な指導計画を、あるいは指導案を作成して行く訓練が必要だと思いますが、なかなか実際に使っている物を見せてくれたり、使わせてくれたりする幼児教育施設はない（教育課程とか指導計画のマニュアルは各施設の企業秘密的な要素もあるので基本的には見せてもらえません）、となれば架空の施設を作って、それに見合う「指導計画（指導案）」を作成できるだけの資料の提供をしたうえで、作らせてみる！ということになります。「保育・実践演習（幼稚園）」のサイドテキストとして作成した「学校法人元気学園・健心幼稚園」や幼稚園教育実習Ⅰ・Ⅱのための「指導計画作成資料（5、6月の計画、9月の計画、10、11月の計画）は必要に迫られて用意したのですが、可能であれば保育現場で実際に使われている物との対比ができるともっと具体的に理解することができたはずですし、不十分なままで去って行く責任を感じていますが、きっとこの想いは継続してもらえるものと確信しております。心残りは保育実習指導の為に「7、8月の計画（月の保育への思い、子どもの姿）を完成させることができなかつたことです。

これらは、今となれば比治山大学短期大学部幼児教育科のオリジナル資料（他大学の教授からももらえないか？と相談もありましたが、比治山大学幼教のオリジナルということで、お断わりしましたが）ということになりますが、実際に保育をアレンジしていくためには、こうした実践に近い資料を学生に提供して、それを元に学生が作成して行く事ができれば、より効果的であると思うのです。これから、より丁寧な具体的な資料の提示と、指導計画・指導案の作成ができるよう指導をお願いしたいと思います。

2. 教育実習で感じたこと

比治山大学短期大学部幼児教育科は保育実習、教育実習、施設実習の時間がとても多いことは、みなさんが承知しているところです。この教科の指導を担当して感じたことは、とにかく大変なセクションであるということでした。特に、学内実習の場合は準備の段階から、成績を決める時までには何度もチェックが必要でした。

しかも、1年生で見学実習、部分実習、2年生では全日実習と外部実習と、幼稚園だけでも4回もある分けて、事前訪問、自己目標、日誌、自己評価までが一区切りですから、とても多くの時間と労力を必要とする教科でもありました。

しかしそれよりも、さらに大変なのは付属幼稚園の先生方だと思います。一つクラスに10人以上の学生が行って、保育を見せてもらい、実習をさせてもらうだけでなく、日誌の指導から実習評価まで本当にご苦労をかけていることを、ありがたく思っています。

「こうして、多くの先生たちの指導をもらって保育者になって行くのだな～！」といつも付属幼稚園の先生方には感謝していました。どうか、「英才教育」なんてものは導入しないでほしいと思います。付属幼稚園は、先端教育をする場ではなく、現実の教育の在り方を学ぶ大切な学習の場であり、幼稚園の先生方は日頃の保育があるにもかかわらず、学生たち一人ひとりに細かい指導をしていて下さることを忘れないでほしいと願っています。付属幼稚園の先生方、本当にありがとうございました。これからも幼児教育科の学生たちのご指導をよろしくお願いします。

3. これからの幼児教育へ向けて

かなり昔ですが、アメリカの西海岸（カリフォルニア州）の幼児教育施設を見学した時に、カリフォルニア州では各教育事務所の指導主事が、保育現場からの指導の依頼や教材等に付いての疑問に細かく対応してもらえるセクションが確保されていました。日本の文部科学省は、

各地の教育委員会に対して、保育現場の教材の相談のような細かい指導を期待していません。ということは、保育現場での悩みを解決してくれる場がないのが日本の幼児教育の現状ではないか？ということです。その部分をどこが、誰が受け持つのか？については今後議論も必要ではないかと思うのですが、当面は、学生たちを送り出した学校側にも役割があるのではないか？と思うのです。

現実には、多くの卒業生が電話をしてくたり、研究室へ来て、子どもへの対応や保護者への在り方、行事を控えての教材の利用について、季節の絵本や歌の選択について相談して帰って行くという現実があるのです。正直な話、かなりの時間を取られる訳ですが、新人で保育現場でまだ、仲間を作れない卒業生にとっては、母校を頼りにするしかない！という現実もわからない分けではありません。安心して保育の相談を持って帰ることができる場所としての大学の役割を考えることはできないのかな？と思うのです。勿論、どなたにお願いするにしてもみなさんとてもお忙しい先生方ですから、簡単にできることではありませんが、「困ったら相談に行き、何らかの示唆やアドバイスをもらって、明日からの保育が楽しくなれるような場所」が必要であろうと思いました。

比治山大学短期大学部幼児教育科を卒業し保育者は、保育現場で教材研究に行き詰った時には、大学へ行けばアドバイスや指導をもらえる！ということになれば、保育現場からの評価も高くなると思うのです。

現在、学生アドバイザーがカンファレンスルームにいてくれるのですが、アドバイザーが常駐し、相談を持って行けるようなシステムを学内に作ってもらえると、たちまちは解決できるのではないかな？と思うのです。優秀な人材を確保することは難しいと思いますが、現在、幼児教育科に在籍している学生もですが、卒業生たちが気持ち良く出入りできるようなシステムを期待しています。

4. 幼児教育科、さらなる発展を！

ある大学の幼児教育学の教授が、「これから保育者養成学校（大学・短大・専門学校）が生き残れるのは、理論と実践がうまくみ合った学生を育てることができる大学だけになる！」と言われたことがあります。

現在の幼児教育の現場は、幼児教育のための勉強や研究をしないことも現実でしょう（これは私が私立幼稚園団体の教育研究のセクションリーダーの経験から分かっているのですが）。しかし、これからの保育者養成校は、単位を出して、資格を与え、就職をさせれば良い！時代は間もなく確実に終了します。

力のある、優秀で研究熱心な保育者を求める様になります。現在は「待機児解消」を目指す国と子どもを抱えたまま、預かってもらえない保護者たちがまだいる分けて、少子（少子化ではなく）が進んでいる現在、保育現場は「資格さえ持っていれば誰でもいい」と言っていますが、その時代はもうすぐ終わります。となれば、保育者の資格を持っていても「実力のない、行動力のない保育者」は解雇の対象になります（昨年度は途中解雇者を出した施設がありました。勿論、解雇されたのは比治山大学の卒業生ではありませんが）。しかも、前述のように理論と実践面が確保されるということが採用の条件になって来るはず。その時へ向けて、「やっぱり、比治山の幼教でなければダメだね！」と言われるような人材の育成を期待しております。

私自身、小さな幼稚園ではありますが、設置者であり園長という立場でもあります。その為に私立幼稚園の園長仲間たちからも、これからの保育者養成学校への期待と願いを、度々聞かされておりますが、共通して彼らから言われることは「力（実力）のある保育者」「やる気のある保育者（多少は不十分であっても）」を求めているのです。

やはり日本では「ピアノは武器」です。「絵本を沢山読んでいるのも実力」とみるそうです。「おはなしを上手に話せるのは素晴らしい」また「歌を沢山知っていて、手遊びも沢山してい

る」等は、就職の面接でもとてもアピールできるそうです。

学生自身が研究したことや学んだことが、目に見える形で、相手に分からなければ評価してもらえないのも現実です。ピアノが弾けると言うのは実際に弾いて見せることができます。製作の指導プロセスを細かく書いてある「導入のプロセス資料」は当然評価の対象になっているようです。井原ゼミが果たさせている「絵本400冊のカード」も目に見える評価の対象になっています。それらの資料を今後どのように利用していくか？はそれぞれの保育者の力量の見せ場だと思います。

役に立つ、子どもの為になる、保護者から信頼される保育者の育ちを期待するものです。

「やっぱり比治山の幼教！」と保育界のブランドであって欲しいです。

おわりに

私は今、比治山大学短期大学部幼児教育科を辞するにあたって、本当に素敵な時間を与えられたことを感謝しています。私のようなものが大学の教授としてどれくらいお役にたてたか？は分かりませんが、何年かの時間の経過の後で、ふと立ち寄った保育園で、幼稚園で素敵な保育者に会った時に、「先生、井原先生ですよ、私は比治山の幼教で先生と一緒に勉強させてもらいました！」って、言われたら、きっと嬉しくて涙がでるんじゃないかな？と思っています。それは短い時間ではあっても、保育者養成に関わった者、教師冥利に尽きることはないでしょうか？

「えっ、そうでしたか？私はあなたの名前を覚えていませんがね、ごめんさい、でも声をかけてもらって、嬉しいです！」とつぶやくでしょうね。幸せなことです。比治山大学短期大学部幼児教育科の教師としてご依頼いただいた、高橋 超学長に、心から感謝しています。

みんな素敵な学生たちでした。もう私からは孫の世代です。ちょっとひねた孫もいました、かなり生意気な孫もいました。でもみんな可愛いくて、素敵な孫たちでした。嬉しいです。可

愛い孫たちにも感謝です。

私の創った言葉に、「保育はロマン！」という言葉があります。

「ロマンとは、見えない未来に限りない期待を持ち続けること、持ち続けられること！」と解しています。

保育者の仕事はそのようなものだと思っています。目の前の幼子たちは、これからの人生の中で、どんなに素晴らしい未来が用意されているのでしょうか？嬉しいこと、悲しいこと、素晴らしいこと、苦しいこと、どんなことであれ、我々保育者は一緒に過ごした仲間の将来への期待を持つ事が許されているのです。どんな人になるのか、どんな仕事につくのか、考えようによっては、私と一緒に過ごした仲間は、果てしない未来への可能性を持って、私の前から飛び出していくのです。期待してやりたいです。

「素敵な人になってね！」と。そして、20年、30年後に会った時、いや会えなくてもいいのです。子どもの（その時は大人ですが）噂を耳にした時、きっと保育者であるあなたは、小さな幸せを感じることが出来ると思うのです。

保育者になって良かった！と思えると思います。そして、私はそのように思える保育者の養成に人生の短いある時期、関わったことを嬉しく感謝すると共に誇りに思うのです。

これから、比治山大学短大学部幼児教育科に学ぶ学生、学んだ学生だった人たちが、さらに幼児教育科で保育者を目指す学生たちを指導される先生方が、ますます素敵に輝かれることを祈念しています。

比治山大学短期大学部幼児教育科、ありがとう、そしてみなさんにも、ありがとう！心からの感謝をもって…！